上村政吉

和田塩屋の出身、砂糖取引業界における権威者。明治十九年（一八八六年）一月十八日―昭和三十九年（一九六四年）五月十七日。焼酎醸造屋の息子として育った君は鹿児島商業学校を卒業して、神戸の貿易商として有名な鈴木商店に入社した。鈴木商店では砂糖部に席をおき、まもなく建設中の同店北九州の大里製糖所に転じた。その後、砂糖生産地の台湾に渡り、さらに同店ジャバ支店支配人として赴任した。ジャバはキューバと共に世界の主要なる砂糖大生

産地で、世界の砂糖貿易はここを中心として行われ、君はその第一線に立って縦横の手腕を振った。当時鈴木商店は赤字で苦境にあったが、君のジャバにおけるもうけで鈴木商店発展の基礎をつくった。帰朝するや君は大阪支店長に挙げられ、ここでも砂糖取引業界に頭角を現わした。

すでにその頃の鈴木商店は三井、三菱と共に日本の三大貿易商であり、砂糖、樟脳、小麦、鉄材などの取引高は日本一と称せられ、スエズ運河を通過する万国商船の積荷の十%は鈴木の商品と言われていた。第一次世界大戦後の比類まれな大恐慌によって流石の鈴木商店も大打撃を受くるに至ったので、ここで君もやむなく鈴木商店を退き、独立の第一歩を踏み出すこととなった。君の独立は砂糖問屋としての田屋商店設立であって、大阪市南区塩町通一丁目に店を置いた。設立当時君は無一文であったが、大日本製糖会社々長藤山雷太（自民党領袖藤山愛一郎の父）が上村なら資金を提供しようということで金を借り受け、大阪商人の土性骨を発揮して営々として田屋商店を築き上げた。現に田屋商店は大日本製糖の特約店であり、日本でも指折りの大手筋問屋である。また大阪砂糖取引所の大仲買人であり、その取引高も高位を占めている。

昭和十九年大東亜戦争による企業整備のために、田屋商店も一時解散したが、同二十六年ふたたび田屋商店（株）を開設して社長となり、渾沌（こんとん）たる砂糖業界に幾多の困難を克服して社運の隆盛を築くと共に、業界発展のために砂糖元売制度を復活して安定を図るなど多くの功績を残した。およそ砂糖取引にして君の関与しない団体は

なく、常に卓見をもって業界を指導した。嗣子一郎は現に田屋商店の社長である。